
藍色まみれのノートブック

おっさん 4 1

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

藍色まみれのノートブック

【Nコード】

N3284M

【作者名】

おっさん41

【あらすじ】

以前短編として書いた小説の連載版です。

出会い

ここは、体育館裏。

普段は誰もいない、俺とて友達と興じていたサッカーのボールが飛んでいかなければここにくることは無かったろう。

いつもは人のいない体育館裏。しかし今日は人がいた。

女子生徒が一人、ぽつんと座って何かを一心不乱に筆を走らせている。

見覚えがある長い黒髪の女の子……思い出した！先週うちのクラスに転校してきた蒼井瑞葉さんだ！
あおいみずは

見ると、サッカーボールはちょうど蒼井さんの近くに落ちている。ボールだけとって、何もしゃべらずに退散、とはいかないだろう。一応クラスメイトだし、転校したての彼女を無視するような真似はしたくない。

出来るだけ平静を装って、彼女に近づき、適当な話を振る。

「こんにちは、蒼井さん。なにを描いてるの？」

「藍色」

短い返答、しかしよく意味が分からない。

覗き込むと確かに彼女はスケッチブックのようなものに藍色を塗っていた。紙一面が藍色で埋まっている。

「色を塗るだけ？絵は描かないの？」

不思議に思ったので質問してみる。

「絵は描くわ。花を描くの。…でもきれいな藍色が出ないから、練習してる」

短い言葉を、淡々と、俺のほうを水に返答した。

色一つにここまでこだわるなんて、よっぽど絵が好きなんだな。

「悪かったね、邪魔して」

そう言って、俺はボールを持って校庭に戻った。

次の日。帰りのショートタイムが終わり、クラス全体が開放感に満ち溢れる。

今日は特に何も予定が無いのでさっさと帰ろうと思っていた俺の眼前を、蒼井さんが横切った。

クラスの誰よりも速く教室から出て行く蒼井さんはやけに目立っていたようで、教室のあちこちから彼女って協調性無いよね、暗いよね、とかひそひそ話がたくさん聞こえた。

それを聞いて、なんだか急に蒼井さんが、寂しい存在であるように思えた。きつと今日も体育館裏で藍色を作っているに違いない彼女を。

いてもたってもいらなくなった俺の足は、自然と体育館裏へと向かっていた。

いた、蒼井さんだ。

体育館裏に、彼女の姿を認識した。

相変わらず今日も、パレットで色を作りながらスケッチブックに色を塗っている。

「調子はどうだい？納得する色は出来た？」

なれなれしすぎたかもしれない。でも、どうでもよかった。とにかく彼女を孤独にしておくのは忍びない。

「まだ。ぜんぜんだめ」

そう言ってこちらにスケッチブックを見せる。素人目には昨日までの色と違いはさっぱり分らない。

一通りスケッチブックを眺めた後、蒼井さんに返した。またもくもくと色を作っては塗る作業を再開する。

何分そのまま経つたろうか。無言が痛い。でも絵に関してまるつきり素人の俺は何も会話の材料を見出せない。

そんな感じで頭を抱えていた俺に幸運が訪れた。

「スケッチブックが切れたわ」

彼女のスケッチブックが全部藍色で埋め尽くされたのだ。

「どうしよう。替えが無い」

完全に困っている。会話を再開させるきっかけはここしかない。そう思っ、俺は隣に置いておいたカバンの中から、新品のノートを一冊取り出して、蒼井さんに差し出した。

「よかったら、これ使わない？」

言っした後で気づく。ノートとスケッチブックでは紙の質がぜんぜん違う。そんなもの渡されたってうれしくないじゃないか！と。

彼女のほうも、困ったような、悩んでいるような顔をしている。

「ごめん。なんでもない。気にしないでくれ」

完全に失敗した、そう思っ俺はノートをカバンに戻そうとしたのだがそれを蒼井さんの手が止めた。

「使わせてもらう」

無表情だ。しかし固い意志のようなものをその瞳に感じた。

「そ、そうか。遠慮なく使ってくれ」

そうしてノートを改めて差し出す。

「そういえばあなたの名前を聞いてなかったわ」

いまさらだが、俺はまだ名乗っていなかった。

そっいえば初めてじゃないか、彼女から俺に話しかけてくれたのは。結構、いや正直かなりうれしかった。

「浅羽だ、浅羽郁^{あさはいく}」

声がうれしさで上ずった。

「そっ、浅羽君」

俺の名前を聞いた彼女が何度と無くその名前を口にする。こそばゆい。

急に蒼井さんがこちらを向く、そして小さく何かつぶやいた。

「……浅羽君、ありがとう」

小さくて聞き取れなかったので何といったのか聞き返すと、顔をうつすらと赤らめてそっぽを向かれる。そのまま、色を作る作業に

戻ってしまった。

結局会話は無かったけど、彼女の隣にいるのはなんだか心地良かった。

…明日からの学校の放課後がとても楽しみだ。

ツクサ

体育館裏に通うようになってから、数日が経った。

俺は邪魔にならないように、蒼井さんの傍で本を読み、蒼井さんは俺があげたノートにひたすら藍色を描いては、時々俺に意見を求めてくる。そんな日々が続いた。

会話こそ少ないが、俺はこの時間が好きだったし、蒼井さんも最初のころよりは俺に対して打ち解けてくれてるように思う。

「浅羽君。この色どう思う？」

読んでいた本に区切りをつけて、蒼井さんが指差しているページの藍色を眺める。

しばらく見た後、感想を言わねばならないのだが、注意しなくてはいけないのは適当に『いいんじゃない』とか言っではいけないことだ。

最初に意見を求められたとき、色のことなんてよくわからなかった俺がそう返事をしたとたん、彼女が表情こそ変わらないものの、不機嫌になるのを感じた。

どうにかしようとあわてた俺がこれまた適当に『で、でももう少し明るいほうがいいかな』なんて言ったら、彼女の頬が少し緩み『善処するわ』ちょこつと嬉しそうにはにかんだ。

それ以降、よく分からないなりに、一生懸命感想を考えるのがここでの俺の仕事のようなものだった。

でも。

「そつえば俺、よく考えると蒼井さんが描こうとしてる花、実物見てないな」

そう、藍色だけ見ても素人としては適当な感想しか言えない。

「蒼井さんが描こうとしてる花ってどこにあるの？よかったら、案内してくれない？」

「わ、私が!？」

いつも冷静でおとなしい彼女がものすごく驚いて、すつとんきよんな声を上げる。

「ま、迷惑だったかな？迷惑だったら、無理しなくていいよ」

まさか、ここまで驚かれるとは思っていなかった。そんなに嫌なのかな？

蒼井さんが深呼吸をしている。ようやく落ち着いたのか、いつもと同じ、あまり抑揚のない声で。

「無理じゃないわ。行きましょう」

そういつて立ち上がった。

立ち上がると夕焼けに照らされてか、頬がほんのりと赤いのが印象的だった。

蒼井さんの案内で学校から少し歩いたところにあるとても広い空き地へとやってきた。

「ここ？」

「そう、ここ」

その空き地は何年も手入れされていないのか、草木が伸び放題だった。

「ちょっと待ってて」

蒼井さんが、草を掻き分けて奥へと進んでいく。

「あった」

しばらくして、蒼井さんが戻ってきた。制服は草まみれである。

「ついてきて」

その言葉に従い、蒼井さんの後をついていく。

「これが、私が描こうとしている花。朝にしか花は開かないから、今は閉じてしまっているけど」

鬱蒼と茂る雑草の中、その植物はあった。

蒼井さんが言ったように花は閉じているものの、その閉じた花はきれいな藍色に染まっている。

昔、植物図鑑で見たことがある。これはツクサだ。

だけど、ここに生えているツクサは通常のツクサよりもより深い藍色の花をつけているように見えた。

「きれいなツクサだね」

お世辞でも何でもない、俺の素直な感想だ。

「私もそう思う」

そう、肯定してくれた蒼井さんの表情は嬉しそうで、でもどこか寂しそうなそんな感情が入り混じっていた。

「ここへはよく来るの？」

絵を描くことに關して、あれほど熱心な蒼井さんだ。当然何回も来ているものと思つてそう聞いたのだが。

「久しぶりに来た。……2年ぶりくらい」

かえつてきたのは予想もしなかった答えと、悲しそうな横顔。嫌な空気が俺と蒼井さんとの間に流れた。

「ねえ、浅羽くん。聞いてくれる？」

「あ、ああ」

そんな空気を断ち切つたのは蒼井さんだった。

彼女は空を見上げて、懐かしむような顔をした後、語り始めた。

「ここ、お母さんとの思い出の場所なの……」

「私、昔この街に住んだの」

しゃべり始めた蒼井さんは、いつも以上に落ち着いていて、穏やかな声だ。

「お父さんとお母さんと私の三大家族で毎日楽しく暮らしてた」

彼女の目線は遠くに向いている。何を見ているのか、俺には計り知れない。

「私が五歳くらいのころにお母さんがここに連れてきてくれたの。今みたいに荒れてなくて、一面がツクサだった。お母さんが好きだったこの場所を私も好きになつていた」

けどね、と蒼井さん話を続ける。辛さを堪えるかのように、うつすらと笑みを浮かべているのがなんだか余計に痛々しかった。

「お母さん。死んじゃったんだ、7年前に。それからお父さんの転勤とかもあっているところに行っちゃったけど…結局、どこでも私はなじめなかった」

「私、昔この街に住んでいたの」

「しゃべり始めた蒼井さんは、いつも以上に落ち着いていて、穏やかな声だ。」

「お父さんとお母さんと私の三人家族で毎日楽しく暮らしてた」

彼女の視線は遠くに向いている。何を見ているのか、俺には計り知れない。

「私が五歳くらいのころにお母さんがここに連れてきてくれたの。今みたいに荒れてなくて、一面がツククサだった。お母さんが好きだったこの場所を私も好きになっていた」

けどね、と蒼井さん話を続ける。辛さを堪えるかのように、うつすらと笑みを浮かべているのがなんだか余計に痛々しかった。

「お母さん。死んじゃったんだ、7年前に。それからお父さんの転勤とかもあっているところに行っちゃったけど…結局、どこでも私はなじめなかった。お父さんの仕事が落ち着いてこの街に戻ってくることになったけど、私はこの場所に来るのが怖かった」

家族を失った悲しみ、俺は経験がないので分からない。けど辛そうな蒼井さんを見ると俺まで悲しくなってくる。

「ツククサの絵を描くのはお母さんのため。お母さんに、お母さんの好きだったツククサを一年中見せてあげたいと思った。…けどうまくいなくて。でも、今日はここにこれて本当によかった。全部浅羽くんのおかげ」

「お、俺!？」

急に自分の名前が出てきて驚く。

「きつと一人じゃここに来ることなんてできなかった。でも浅羽君となら行ける、そう思ったの。……迷惑だった?」

「迷惑だなんて!そんなわけないじゃないか!」

案内してくれ、と頼んだのは俺のほうだしそんな風に言ってもらえるとなんだか蒼井さんから信頼されてるみたいでうれしかった。

「そう。よかった」

心底うれしそうにほっと胸をなでおろす蒼井さん。そうして俺を真正面から見つめる。

「もしよかったら…明日からも体育館裏に来て。……待つてるから」
そう俺に告げた後、足早に帰っていてしまった。

答え？もちろん決まっている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3284m/>

藍色まみれのノートブック

2010年10月9日00時22分発行